

連載 名画で読む「骨」の物語

第1回

# スペイン・ハプスブルク家

中野京子

作家・ドイツ文学者

プラド美術館の至宝『ラス・メニーナス(=宮女たち)』は、ベラスケスの目も眩む超絶技巧によって、3世紀以上にわたり世界中の人々を魅了し続けている。オペラの舞台を思わせる大空間に、スペイン・ハプスブルク家の幼い王女マルガリータ、侍女や臣下、カンバスを前にした画家本人、そして中央の鏡の中には、国王フェリペ4世とその妃がぼんやり映っている。総勢11人。

かつてこれは、「王の家族たち」のタイトルで登録されていた。ここにいる者はみな王家の一員という意味だ。もちろん右端にいる小人症の男女も含む(フェリペは「きょうだい」と呼びかけていたらしい)。だがたとえ王にそう呼ばれ、着飾って同じ画面におさまっていても、金で買われた奴隷であることに変わりはない。慰み者あるいは道化と呼ばれた彼らは、王侯貴族の日常を活気づかせる役目を担っていたのだ。

右から2人目の女性はドイツ人で、名はバルボラ。骨の発達が悪く、成人にもかかわらず5歳のマルガリータ王女とさほど変わらぬ身長だ。胴体に比して頭部が大きく、手足が極端に短い。額が突き出て鼻の付け根が凹み、手の中指と薬指のあいだが開いている(三尖手)。

軟骨無形性症のこうした特徴を、ベラスケスはきわめて冷静な筆致で描き出している。

バルボラが着ている豪華な衣装をみればわかるとおり、肉体労働に酷使された一般奴隷に比べ、小人症の奴隷たちの取り扱い方は格段に恵まれていた。市場における値段が高く、どの国のどの宮廷でもステータスシンボルとして、また富の誇示として、需要が大きかったからだ。まるで現代の珍奇なペットのように。

非人道的で残酷なこの時代、貧しい親は不自由な身体に生まれついた子を見世物小屋に売り払うことも多かった。たまたま宮廷に買われたバルボラは一生衣食住には困らず、その意味では幸運だったが、しかし幸福だったかどうかはわからない。彼女は王からマルガリータ王女へのプレゼントとして贈られたペットであり、可愛がられたかもしれないが、それは主人のお情けや気まぐれの方向次第である。何ひとつ自由はなかった。

ベラスケスは、バルボラのほか、宮廷で暮らすこうした奴隷たちを数多く描いている。どの作品においても、蔑みや笑い、妙な同情の視線などは微塵もない。彼はただ人間というものを、卓越した把握力で丸ごと捉えたの